

しばしば、私は、幼児の中に、おとなと同じような内心の戦いがあることに気付かされて驚く。いや、それはむしろ、逆にいうべきかもしれない。おとなが自分の心の中で戦い格闘していることは、すでに、幼児期に、もっと素朴に、経験していたことであるのかもしれない。

四歳の子どもが、その妹が三歳になったときの誕生日に、ノートと鉛筆を兄からプレゼントにもらった。四歳の姉は、じっと見ていたが何もいわない。兄が、「それ、ここにいれたら、」と、その子のだいたいなものの箱にいれたら、「そこ、あたしのだいたいなものいれるところよ、だけど、キョウドウにしようよ、キョウドウ」という。そして妹の誕生日だと張切っている。ふだんは、とてもがまんでできないことを、がまんしたのである。

その同じころ、その子どもがいう。「お兄ちゃま、自分の妹には、シンセツにしなればいけないのよ、」そして夜、ねにゆくとき、「お兄ちゃま、おやすみなさい」といいにゆく。この子どもの中の心には、こうしなさいと命令する自分ができてきたのである。めっちゃくちやなことが多かったこの子どもが、急にききわけができて、いい子になったとき、この子は大きくなったといっ

ておとなはよろこぶ。その同じ子どもが、あるとき、赤いえのぐをしたたらせて、「天使が、けがをしたの、戦争してるの」という。それは子どもの中の内心の葛藤をあらわすと直ちに解釈をしてしまったら、それが定式となってしまうたら、何か足りないような気がする。けれども、その赤いえのぐをじっと見ていて、いい子になったこの子の言動をみると、私は何か、胸を刺される思いがする。四歳の子どもは、気張ることもなく、さりげなく、いい子になって振舞う。けれども、それができるのがあたりまえと見ってしまったのでは、あまりにも大人勝手だろう。その同じ子どもが、数日後には、積木をひとりじめにして、どうしても妹にかすことができない。そうすると、おとなは、小さい子にはかしてあげなさい、とこわい顔をする。人は、ある限界をこえると、内心の戦いに敗れるのである。子どもでも同じである。このことから十年も経ったとき、この同じ子どもが、あるときふともらす。「あたしの心の中には、二人の自分があって、ひとりがかうしなさいという、ひとりか、こうしなさいというの」。こういうことに会おうと、またあらためて、四歳のときにも同じことがあったのだと思う。小さく、幼い子どもも、それぞれ、生活の中で、求め、戦っている。私は、何と、ころないことが多いことをかと思う。